〈鳥海山麓だより〉二〇一一年夏

オタマジャクシ供養塔

鈴木京子

夏は、農村の手間賃労働者にとって最高の「稼ぎ時」である。

まずはダイコン。田植えが終わって間もなくの六月始めから、カワマタさんちへ一週間通う。カワマタさんと妻のケイコさんが朝早く収穫し、葉を落として洗った約三〇〇本のダイコンは、昼過ぎには水分が蒸発して、私を待っている。

一本ずつヒゲ（あの細い根のことね）をむしって、サイズを合わせ、一箱当たりの重量を計りながら、詰める。作業場の納屋にはちょうどツバメが巣をつくり卵を温めている。ラジオから流れる演歌を聞きながら（カワマタさんのラジオだからね、チューニングをいじるわけにはいかない）、一日三時間くらい作業する。いつもなら一人静かな心地よい労働なのだが、今年はうるさかった。町議会選挙とぶつかったのだ。

ここに越して来て驚いたことの一つが、地方選挙の投票率の高さだ。前回二〇〇七年の町議選が七九％超。二〇〇九年の町議補選、町長選ともに七八％超。これは、市議選で四〇％台、市長選で三〇％台、県知事選で二〇％台の埼玉から来た人間には驚異の数字である。同じ部落のトオルさんが、初めて投票する娘に「オメエ、選挙いがねど（行かないと）、チェックされて罰金だよ」と言ったのが、冗談に聞こえない。

選挙カーが近くに来ると、隣りのばっちゃんは、わざわざ家から出て来て手を振った。支持者なのかな。ん？　ばっちゃんは次の選挙カーにも同じようにした。あれ？　結局、四、五台に手を振った。

「たいへんですね」
「さっきカンジさんに振ったさげの。おぼえった人にはみなふんねばなんね（知っている人にはみんな振らなければならない）」
そういうことか。結局、ばっちゃんが誰に投票するかは、その行動からはわからないのね。
そんな選挙だから、一人ぽっちで作業しているとたいへんだ。ましてカワマタさんは地域のリーダー格の農家さん。人影を見つけて、選挙カーが停車し、たすきがけの候補者が「もっけだ、もっけだ」と言いながら納屋に入ってくる。
「あの、家の人は畑で誰もいませんが…」
「んだかぁ…。んまあ、いなだいなだ（いいんだいいんだ）。へば、まずはよろしく頼むのっ」
その度に軍手を外して握手した。

六月中旬からはいよいよ田の草取りだ。今年は、私と私の同居人、そして田んぼのオーナー・エイジさんの三人で、ひと月半をかけ、約三町歩（三ヘクタール）を二周した。
一周目はイネ丈がまだ三〇センチ程度。田んぼは、本当にたくさんの名も知らない命で満ちていた。オタマジャクシ、カエル、その中間、生まれたて五ミリのイナゴ、脱皮したてのトンボ、タニシ、ホタルの幼虫、その他いっぱい。
そんな田んぼで、今年初めて経験した、とても大切な音が二つある。オタマジャクシを踏みつぶしてしまう音と、トンボがツバメに捕獲されてしまう音だ。
田の草取りは一条（一列）をまたいで入り、左右それぞれ二条の草に手を伸ばしながら前に進む。人が動けば虫たちは逃げるけれど、その進行方向に逃げ続けるとキリがないのよ。何よりオタマジャクシは多過ぎる。私が足を踏み出す度に、何匹かがゴムの田植え靴の底で「ポチッ」。オタマジャクシの供養塔を建てたいという私に、「踏むほどたくさんいるなら、いいんじゃないか」とエイジさん。
そのエイジさんが「こら、あっち行け」「わあ、来るな」「ダメだ、飛ぶな」と騒いでいた。見ると、エイジさんの周囲をツバメが数匹、旋回している。稲株に身を隠しているトンボは人が動くと逃げる。逃げようと浮上した一瞬を、すばやくツバメが捕獲する。
「クシャッ」
「パクッ」
これが、ツバメがトンボを捕まえたときの音。いつの間にかツバメは十数匹に増え、三

人の進路を狙っている。人間からわずか二〇センチの距離でトンボを捕まえる。「ツバメにとって、オレら、追い子になっちゃったんだね」と、エイジさんがあきらめたように言う。

そうなんだよね、人間よりも他の生物が多い農村の暮らしの中では、虫も鳥もそのほかの動物も、人間を一方的に怖がったりしないし、利用さえする。人間様が、生態系の序列の一番上にいると勘違いできるのは、人間様の姿しか見えない都会でだけ、ダネ。

そんな田んぼも、草取り二周目に入った七月には、イネ丈が膝上にまで成長し、オタマジャクシやトンボの姿はない。ときどき鴨の親子の足跡がペタペタと残っている。

七月後半からお盆にかけては、メロンやスイカの箱詰めに通い、そして、今年は初めて、お盆用生花の収穫と出荷にも行く予定。

さあ、それが終わったら一休みだ。

そして、もうひと月半もすれば稲刈りが始まる。

Photo : Kyoko Suzuki

山形県遊佐町から望む鳥海山